

あなたたち燃えなさい

—授業でのロールプレイ（役割演技法）
導入の試み—

幼児教育学科 山田 真理子

I. 前置き

相手の心にひびかなければ、どんなにりっぱなことはも何の役にもたたない。相手に変化が生れなければ、どんな理由づけも言い訳でしかない。こんなことは、私がかつてカウンセリングや心理治療といった仕事に心傾けていたころは、あたりまえのことでした。どんなりっぱなことをカウンセラーがまくしたてたところで、患者さん（クライエント）が“そうか！そだ！”と思わなければ、何の役にもたたないどころか、“私の気もちをわかつてくれない先生”と去らせてしまうか、“自分の気もちなど誰も分ってくれないものだ”という失望を強くさせてしまうかして、かえって害になるということや、どんなに理論的に正しいことをやっていても、クリエントの苦しみが一向に変化しなかったり、クリエントがすこしでも良くなっていると感じられるようにならないなら、それは言い訳にしかならないといふことなど自明のことだったのです。ところがこれを教官と学生におきかえた時、私はハッとするのです。授業中私語の多い学生、死んだような目をしてただすわっているだけの学生、質問しても「わかりません」と平気で答え、自分で考えようとせずすぐ正解を教えてもらいたがる気質、何をやっても適当に、手を汚さず、深く悩まず、狂喜することもない……。こんな学生を、困ったものだ…と思いつつ、私語したくなるような講義しかせず、目が輝きようもない話しかもたたず、考えてみたいと思うようなテーマ・質問をも与えず、身をのりだしたくなるようなものも提供しなかった教官自ら（つまり私自身）を自問することなく慢燃としていたのではなかったか…と。

あまりに真剣にならない学生に腹をたて、「あなたたち、そんなら保

母になるのやめなさい！」と怒鳴つて帰宅した日、私は主人（医者）にこ
う言われたのです。「おまえはいいなア。ボクは“あなたそんななら患者
やめなさい！”とは言えないものなあ」。そうだったのです。どんな相手
を前にしても、なつかつ何とかしようとし、何とかする技をもつていてこ
そ、プロなのです。

燃えない学生なら 燃やしてみしょう！
燃えないのは学生ばかりのせいじゃない！

II. 手順と手がかり

ちょうどそのころ、読むたびに腹がたってたまらないあるできごとの記
事が、何回か新聞に載っていました。私自身が燃えることのできるテーマ
を選ぶ。これがまず第一の手がかり。

頭で考えるだけなく、その人の身になって考えるような技を使うこと、
これが第二。それには、私がかつてカウンセラーになるためにうけた訓練
の中でかなり重要なものであったロールプレイ（役割演技法）を導入して
みることにしました。これは、その役割になって、即興の寸劇をするよう
なことです。幸い学生達はこれまで私の授業の中でもたびたび、保母役・
子供役をとつてのロールプレイを実施していました。

場面設定としては、二者の対立ですと、物分かれ的要素が強くなるので、
三者会談の形が最も様々な“考える素”が生まれ出しそうに思いました。こ
れが第三の手がかり。

全員参加で自由発言とするとなかなか発言しにくく、またまとまりにく
いので、まず三つの役割に分れた後、各グループの代表者を出し、代表者
会議の形式をとることにしました。ただし残りのものはそれぞれ代表者の
うしろに陣取り（支援団体といった雰囲気）、発言したくなったら代表者
でなくとも発言してよいということにしました。これが第四の手がかり。
以上の骨子を決めて私は実施に踏み切りました。初冬の第五时限、タヤ
みが近づいていました。

III. 実 施

1) テーマ提出、まずは新聞のコピーを配りました。長崎の某小学校で、脳

性マヒのある子が、普通学級への参加を許されたことに對し、他の親たち
が“自分の子に迷惑がかかる、授業の進度が遅れる”等の理由で反対運動
をおこした件。“ミカンはミカン畑で、サツマイモはサツマイモ畑”での
セリフが衝撃的でした。討論では、場面を幼稚園（保育園）と変え、障害
児の様子を“みんなにとけてめず、すぐ外にとび出しことく人にかみつく
ことがある”としました。

2) 役割；障害児をもつ親あるいはその親への賛同派、障害児を受
け入れて保育してゆこうとした園側、障害児と一緒に保育することに反対
する健常児の親たち、の三者としました。そして、代表者会議の前に各グ
ループ（實際には障害児の親グループ：50余名、保母グループ：30余名、
健常児の親グループ：10余名なりました）の作戦会議をひらいてもらい、
それぞれの主張を考え合ってもらいました。

3) 代表者会議；各グループ二名（障害児の親グループは多かったですので四
名）の代表が出て円陣のようにすわり、各代表者の後にズラリと全員がす
わりこみました。一応、保母側がこの会議の司会役をとってはじめること
になりました。

討論内容は後に記しますが、とにかく白熱してアッという間に授業時間
の終了まぎわになり、あわてて中断したというような具合でした。

4) 反省会；発言したりなからたり発言しきたりで、まだわだかまりが
残っている風もあり、反省会として各グループすこし話合いをもちました。
5) 感想文；興奮さめやらずといった顔が多く、また、心におさまりが
つかないものをそのまま残せることの書も思って、感想文を書いてもら
うことになりました。（抜粋後述）

IV. 討論内容・経過

（発言者、シ；障害児の親側、保母側、ケ；健常児の親側）
保；それではH君の件に関して、それぞれの立場の御父兄にお集り頂きま
したので、話合いをはじめたいと思います。
ケ；だいたい無理な話なんですよ！（あまりに真剣な口調に笑いがおこる
がすぐに消え、笑ったの方がかえってバツの悪い様子）障害のある子
を普通の園に入れようなんてこと自体ですね、無茶なんですよ。第一、
H君はよく部屋をとび出したり、門から出でていったりするということで

すが、そんな時、担任の先生がおいかけて行ったりするでしょう。その間残された子たちは保育もうけられず、どうしたらいいんですか？保；他の子たちはよく分かっていて、自分たちで遊んで待っていてくれています。

ケ；それは保母の勝手な言い分であって、子どもですから、その時どんな危険になるかもしれないでしょ。何かあった時、どうしてくれれるんですか？誰が見ていで誰が責任もつてくれるんですか？そういう時に見てくれる保母を一人増やしてくれるんですか？

保；保母を増やせば問題は解決するんですか？
ケ；少なくとも危険は少しは避けられると思いませんけど、それで解決されるわけじゃありません。

保；保母を増やせばいいのなら、園としてはそういうことも考えていますけど

ケ；それだけじゃありません。

シ；保母が見ていなければ危険という意味でいうなら、自由遊びの時一人一人がバラバラで遊んでいたら、一人一人に保母が一人づつかなければならぬということになりますか？

ケ；それは違うんです。ふつうの子はバラバラで遊んでいても保母は子どもたちの行動を予測できるし、だいたい把握できるのです。ところがそこに、全然予測できない行動をする子が一人入るだけで、保母の注意力はそこにむけられてしまって、他の子の様子が見えなくなってしまうのです。ふつうの子が一人入るのとは全然違うのです。

シ；ふつうの子と言いますが、障害をもつていてもふつうの子と同じところはたくさんありますし、だからこそ他のお子さんとの交流をする中でのびるところがあると思うんです。

ケ；それは言いますけれど、その子が入ったために保母さんはずいぶんといへんな思いをしておられると思います。

保；でも私たちもがんばって、H君がすこしでもよくなるようにと思っておりますし、私たちの目から見たらずいぶんよくなつたと思うんです。
ケ；しかしH君がいなければその努力は私たちの子どもにもむけられるものでしょう。H君にかなりの力が注がれるために、本来私たちの子どもにもむけられるべき保育や配慮が減っているということはありませんか？

ケ；ですから、障害をもったお子さんはやはり専門の方に指導して頂いた方が……。

保；私たちも専門家の方の指導をうけながら保育しているわけですか？
ケ；でも専門家ではないし、障害児に関する専門的な教育もうけておられないでしょ。そういう人にまかせられてはH君自身にとってもよくないじゃありませんか？

シ；そういう風に障害児は障害児の専門家にという考え方か、障害をもつた子を差別し、理解しようとしていることになると思うんですけど；しかし、専門家や施設というものががあるということは、そういうものが障害児にとって必要だからでしょ？もししふうの中で育てた方がいいのなら、なぜ施設を国が作るんですか？

シ；私は知りません。私が作ったわけじゃありませんから。ただ私は施設に入れることが最善とは思いません

ケ；でもそやつてそちらの考え方でこいつふつうの園に入れられても、こっちははっきり言って迷惑なんです。H君は人をかんだりするでしょう？うちの子もかまれました。こんなことはどう考えたらいいんですか？

保；それはH君の表現なのです。H君はおたくのお子さんを好きだから、あいう表現をするのです。

ケ；それじゃなんですか？うちの子が「かまれたー」と言って帰ってきたら、「それはね、H君がおまえを好きだからなのよ、うまくいえないからかみつくの」(笑)って言うんですか？そんなこと言えませんよ！
保；今は私の言い方が悪かったんですが、H君もH君なりにみんなの中に入りはじめているんですよ

ケ；だから、交流がいけないと言っているんじゃないです。保育に支障が出来たり、子どもががけがしたりしないように、H君には専門家なり施設なりがあるんですからそちらに行つてもらって、そして交流の場は、保育とは別にもつたらいいと思うんですけど…。それを保育の中に入れるから、かみついたり…と。

シ；ではうかがいますが、おたくのお子さんが決して人にはがをさせたりしないと言い切れますか？それにH君がかみついたとばかり言いますが、それは先にそちらからH君に向かしたからかもしれません

せんか。H君は何も言えないとおもいますから
ケ；それじゃこっちの方が悪いようじやありませんか。そりゃうちの子も
人にけがをさせることくらいあるかもしませんが、それとはちがうと
思います。

シ；どうちがうんですか？　そんなふうに「かまれた」と言ってきた時、
具体的にお子さんにはどう答えておられるんですか？

ケ；まさかH君は好きだとかみつくのよ、とは言えませんよ。うちの子ま
でそんななつたら困ります。

シ；じゃあどう言ってるんですか？　あの子はちがうんだからとか？

ケ；かみつかれるのがいやなら近寄らんときなさいと言うしかないでしょ
シ；そんなア！　それじゃ一緒にいる意味がないじゃありませんか

ケ；そうですよ。それに、こちらが迷惑だというだけじゃなくて、H君に
とってもキチンとした専門的な指導がなされないことはマイナスじゃな
いかと思うんです

ケ；交流と保育はやはり別にしないとふつうの子の成長まで阻害されてし
まうんじゃありません？

シ；じゃあうかがいますが、そういう交流の場を別にもつとして、そ
ういう場にあなたは参加なさいますか？

ケ；うちの子にとつてそれが必要であると思えば行きます

シ；今思いますか？

ケ；今は思いません

シ；そんなふうに特別に交流の場を設けて、さあ今日は特別よという風に
障害児と交流したら、それはあの子は特別な子、変った子という目で見
るだけで、かえって差別を生むことになると思うんですけど（拍手）

ケ；しかしほうの内で一緒にいたって、いつも部屋をとび出したり、人を
かんだりしていはやはり変な子と見るだけだと思いますけど

保；でもH君はほんとにかわいいんですよ。少しづづよくなってきてている
んです。人間誰でも障害ってもつていると思うんですよ。お母さん、あな
た眼鏡をかけておられますがけど、それでも障害といえるんじゃないでしょ
うか

シ；あなたのお子さんも今、元気でみんなとやっていますけど、いつ事故
にあったり熱が出たりして障害児になるかもしれないんですよ。そんなん

時どうなさいますか？

ケ；そんな時は、私なら、専門家のそろっている施設に入れます！
保；とにかく私たちはがんばってみようとしているんです。保母をひとり
増やすことも考えていますが、それ以上に子どもたちも助けてくれてい
ます。お母さん方も一度保育を見に来て下さい……。

かなり抜粋して討論の流れを書きましたががおよそ一時間、話は途切れることがありますでした。発言は代表者だけではなくフロアーからも次々とおり、保母は涙をうかべ、手を握りしめてうたえっていました。私が時間切れを告げた瞬間、皆ハッと現実にひき戻されたような表情になり、席に戻ってゆきました。

V. 感想文

1) テーマ（障害児保育あるいは交流ということ）に関して、
保母という仕事の難しさを改めて思い知らされた。もし今日のようないが、
とが実際におこったら私はちゃんと対処できるのだろうか。自信はないが、
泣いておわらせるということだけはしたくない！（桑、他）
将来保母になった時は、障害児も平等に保育してゆきたいと思いました。
一部の父兄から文句や苦情が出るかもしれません、はつきり言いたいと
思います。“子ども達は皆同じなのです。あの子だって私たちの愛情を待
っています。あの子にも私は愛情を伝えたいのです”と。（III）
どうしてこんな事を話合わなくてはならないのだろう。こんな事が現
実としてあるのか…とものすごくショックでした。話しの間中、すごく悲
しかったです。でもそれが現実ならば、その悲しみをのりこえて、反対す
る親と戦って、理解を得られるようにがんばりたいと思いました。（金）
もし私に障害のある子どもが生れてきたら、私は施設の専門家の手では
なく、自分の手で育て、自分の目で子どもの発達を見たいと思いました。
並の苦労じゃないと思います。でも、親の愛情が一番大切だと思うのです。
それと反対に、自分の子どもが通っている園に障害児がいて、他の親達が
入園を反対するようだったら、私は反対する親達にわかつてもらおうと勧
きかけたいと思います。（米）
頑固に拒絶する健常児の親たち、それを否定する障害児側、保母、泥試

合です。しかし絶対にいい加減にしてはいけないです。お互いが納得するまでにはかなりの時間をするでしょう。しかしそのことがとても大事なことなのです。絶対にわかつてもらわなければいけないのです。人間として生れた限り…。(平)

交流の場という考え方そのものが差別を生み出すと思います。いつも一緒に自然な状態で生活する中にお互いの成長があると思います。現在、障害者が差別的な目で見られたり、健常者(児)の中でも少しでも劣ったところがあるといじめの対象にされたり、のけものにされたりするのは、施設などが完璧してきたことに一因があるのではないかと思いました。(山、他)

障害児保育の問題が実は保育の中の子ども達の問題ではなくて、大人達の問題であることに気づいて、とても哀しい気持ちになりました。(武)

健常児の母親役をやってみて、この人達の言い分にもっともなところがあるとを考え直しました。そして本気になって「障害児は障害児のための施設に入れるべきだ」と言ってしまい、自分の中に障害児排除の考えがあつたことに我ながら驚いています。(佐)

2) 授業形態について

とにかくひと言で言ってすごい授業でした。真に迫っている感じでした。(原)

みんな本気で夢中になり、目が一点に集中し、真剣なふんい気が部屋中に充満した授業は私にとって初めてでした。(山)

久しぶりに時計を気にしない授業をうけた。(山)

あつという間に終ってしまった。途中何度も涙をこらえることができず泣いてしまった。“特別な場をもって交流すれば、特別な子という思いをうえつける”という意見には心の中で拍手喝采をしていた(桑)

教室を出る時、友だちに『興奮しとるっちゃろ。顔が赤いよ』と言われました。本当に頭の中も体もかっかしていました。(立)

これだけ言ってもわかつてもらえないのかと思うとなさなくて、それには感情的になってしまって自分の気持ちを言葉に直してうまく言えない自分の未熟さを思い知つてしましました。まだまだ勉強しなくてはと意欲がわいてきました。(J)

健常児の母親の意見に反発したくて、思わず涙が出そうになりました。でも泣いたら負けです。怖いくらいでした。そしてきいているどの人言い分にも納得する所があるて、そのうち自分の言っていることが正しいのか自信がなくなっていました。とても考えさせられて、うれしかったです。(山)

代表者ではありませんでしたが、もう黙つていられなくなりました。

(武)

話をがもり上がるにつれ、現実の語合いを見ているように思え、悲しくなってきた。そして、子どもぬきで話合っていいのか！と思った。私たちはもっともっと真剣に考えなければ…。とても悲しい1日だった。(袋)

言い負かされると復がたって「くそーぜつたいに負けんぞー」という言になり、反論できなくなると相手の言い分より、ただ「くやしい」という気持ちでいっぱいになりました。話し合いではまず素直に相手の言い分をきくことができるようにならないと、せっかくの正しいこともムダになることがよく分りました。(佐)

V. 考 察

(なぜ「燃えなさい」なのか)——無感動再生産の鎖を切る)

人は自分が体験した(してもらった)ことしか人にしてやることはできないものだと、子どもを育てていてよく思います。母が私してくれたであろうこと(記憶にあることもないことも)を知らず知らず我が子にもしているのです。さてこれを再び教官と学生におきかえてみた時、そして学生が保母となった時の保母と子どもにもおきかえてみた時、私は背筋の寒くなる思いがするのです。もし教官が、学生が理解できようとできまいとかまれず、学生のやる気をひき出すことをせず、ただ私語を叱り、居眠りを禁ずるだけで授業を進めていたなら、その学生が保母になつた時、自分が受けたその教育体験の再現しかできないとしたら、子どもはつまらない話にうんざりし、やる気をなくし、先生に叱られないようになだおとなしく無感動にすわっているだけの木偶人形にされてしまうのではないかと思うと…。子どもをおさえつけ、子どもにも押しつけるだけの保育しかできることになるのですなかろうかと思うと…。その子どもも達は、反抗もせず、自分で考えることなく、人から与えられない何もできず、見た目だけ

けきれいに仕上げることに専念し、その気になりきって生き生きすることもなく、ただ叱られないよううにうまくたち回るといった青少年に成長してゆくことになるでしょう。そして思春期になって「一体自分は何なのだ！親や他人に作られた人形じゃない！」と自己主張をはじめたらまだしも（これは多くの場合、問題児とよばれることになりますが）、そのまま成長すれば、先に述べたような無感動な学生となり、もしそこでも“燃える思い”を体験せずに卒業すれば、無感動な保母がたくさん作り出されてしまうことになり、それによって、その何十倍もの無感動な子どもが再生産されてゆくことになるのです。だからこそ、私は私のできるところでの再生産の鎖をたち切りたい、せめて私の力の及ぶところでは、“燃える体験”をしてほしいと願うのです。

どうか今、“燃える体験”をしたあなたたち、燃える心をもった子ども達を育てて下さい。（今回の授業が、全く自由な討論でもなく、また逆に全く一方的に与えられた講義でもなかったことは、あなたたちに保育における導入のヒントを与えてくれるはずです。第三者の立場で頭で考えたのではなく、そのものになりきってみて、その気になってみてやることによつてこそ燃えたということが、保育において子どもがその気になることの大切さ、その気にさせることの重要さを教えてくれているのです。きっとこのことをあなたの育てた子ども達が、いつか私の前に学生としてすわり、目を輝かせ、ほほを生き生きと絢爛させ燃えてくれる日がたのしみです。）

あなたの育てた子ども達が、いつか私の前に学生としてすわり、目を輝かせ、ほほを生き生きと絢爛させ燃えてくれる日がたのしみです。
あのひと時、私と共に燃えてくれたあなたたちに、　ありがとうございます。

追記：尚、日が経つて今思うに、この体験は、“燃える”ということばから連想して言えば、“小枝も幹も葉も根も、枯木も生木も何もかも一一把ひとからげにして、石油をぶっかけて火をつけた”としても言うような燃やし方で、各個人の個性や性質への細かな配慮がなかつたといふ気がします。それは、弁解させて頂ければ、私は現在、集中講義形式で授業を行つてゐるため、年に2～3日しか学生に出会えず、そのため、学生一人一人の個性を把握する間もなく、まだ学生も私に慣れ親しむゆとりのないままに講義をすすめねばならないという状況であるからなのです。だから、私の授業を印象深く、魅力的なものにするために、いわば“派手なこと”をやらねばな

らないといえるかもしれません。週に何回も学生と顔を合わせ、学生の個性を把握して指導をすすめる余裕のある先生方は、おそらくもつときめ細やかな工夫をなさって、学生の秘められた力を引き出そうとしておられるのだろうと信じます。